

2018

友引町内会 通信

Vol.216

2



いてづる
凍鶴の 一步を賭けて 立ちつくす

山口 青邨

鶴は首を翼の中に突っ込んで眠り、雪の中では片足で立っています。静けさの中で高貴な感じがします。しかし、もし足が折れたら、雪の中に倒れて立ち上がれず、凍死するかも知れません。生きるとは、一步に賭けているようなものです。凍てつくような日々であっても、心に支えをもって、すっくと立っていたい。

年暮る

毎年 12 月になると東山魁夷の画集を開きます。その中の「年暮る」(1968 年)という作品が好きだからです。たぶん、定宿にしていたホテルの窓から見た雪景色の京都の街の画です。その画集に添えてある魁夷の文書がまた素敵過ぎます。

『年を送り、年を迎えるこの時に、多くの人の胸に

浮かぶであろう、あの気持ち。去り行く年に対しての心残り、来る年に対してのささやかな期待。年々を重ねていく凋落の想いと、いま、巡り来る新しい年にこもる回生の希い。「行き交う年もまた旅人」の感慨を、京の旅の上で私はしみじみ感じた。こうして、私の京の旅は終わった。…』(『東山魁夷画文集 美の訪れ』より)

この画集に出会ってから毎年暮れもおしつまと無性に京都盆地の少しだけ重い冬の風が恋しく街を歩きたくなります。平野を吹き抜ける岐阜の「伊吹おろし」に比べて湿気を含んでいるように思います。今年も、本当は仕事をしておかないと、かなりせっぱ詰まった状態になることはわかりつつ、つい出かけてしまいます。阪急電車の四条河原町駅を下車、階段を登り地上に出ると、私の期待を裏切らない風が心地よく迎えてくれます。裏寺通りを北へ。この辺りは妻が生まれ育ったお寺があった場所。6歳のころ大原へ移転したそう。妻は幼少をここでどんな年の瀬を過ごしたのか想像しながら

そのまま北へ。矢田寺さんを通り過ぎると、岐阜人の私を信長公が迎えてくれる本能寺。と言っても、明智光秀に討たれた時の本能寺は現在と違う場所だそうです。このお寺、現在は商店街とビルに囲まれた都会のお寺で観光的要素は少ないので観光客はほとんどいません。境内に入ると、近代的な宝物館と木造の本堂があります。その相反する建物の間をうまく取り持つ



ているように楠の大木があります。楠のおかげで都会の中にあって清閑さは保たれています。不思議な魅力のお寺だと思います。大木の下にはさりげなくベンチが置か

れています。「ここでのんびり日向ぼっこをするといいよ。」と教えてくれたのは親しい人です。更に境内の7軒の塔頭寺院を通り過ぎると不思議な路地が現れます。身を任せ吸い込まれて行くと出た先は人が多く歩く河原町通りです。「静」から「動」へ、この「いきなりさ」を味わえるのも魅力です。

賑やかな通りに排出された私は、その近くの古いビアホールにて「牡蛎フライ定食」で遅い昼食をとることになります。隣のテーブルには頬に年輪を刻まれたご夫婦が黒ビールを楽しそうに飲んでいます。とてもお洒落なお二人です。私は窓際に座り、お二人と通りを行きかう人をぼんやり眺め幸せを感じています。こうして、私の「空想」の京の旅が終わりました。

俊徳丸